

Wolf-Rayet星及び星風の構造 と質量放出率について





🛞 Mon 25 Dec 2017 in Univ. of Tokyo 🚱





目次

- 1. Introduction: WR星とは, 研究動機
- 2. 計算手法について
- 3. 計算結果及び観測との比較

4. まとめと議論

1. Introduction

Wolf-Rayet (WR) Star 1867年発見

- ・進化の進んだ大質量星: $M_{\rm WR} \sim 10-40 \ {\rm M}_{\odot}$
- ・幅が広く,明るい輝線放射
- ➡ 強い星風の存在を示唆 大きな速度: $v_{\infty} \sim 1000\text{-}3000 \text{ km s}^{-1}$ 大きな質量放出率: $\dot{M}_{w} \sim 10^{-5}\text{-}10^{-4} \text{ M}_{\odot} \text{ yr}^{-1}$
- ・スペクトルに水素の吸収, 輝線がない.
- ➡ 質量放出により水素層を失った, Heを主成分とする星としてモデル化される. Langer 1989a
- ・星風自体が光学的に厚い.
- ➡ 星表面及び星風加速領域の構造は見えない. 星だけでなく星風も同時に扱ったモデル化 が必要.





2. 計算手法について

Basic Equations

Kato & Iben 1992 Kippenhahn et al. 2012 DN, Hosokawa, Omukai, Saio, Nomoto 2017



境界条件及び星-星風の接続

Lamers & Cassineli 1999 Kato & Iben 1992 Kippenhahn et al. 2012 Ro & Matzner 2016



質量, 化学組成, $v_{\infty}/v_{\rm esc}(r_{\rm s}), \beta$ を与える. \checkmark $L_{\rm ph}, \dot{M}_{\rm w}$ が唯一に決まる.

*先行研究: 遷音速点の扱いが不適切, M_w を経験則から与える.

3. 計算結果及び観測との比較

星風付きHe星モデルの構造



星風付きHe星モデルの構造







*質量放出率はパラメタ($v_{\infty}/v_{esc}(r_s),\beta$)にあまり依存しない. *スケーリング則: $\dot{M}_{
m w} \propto L_*^{1.2-1.3}$, 観測に近い $\dot{M}_{
m w} \propto L_*^{1.18}$ Hainich et al. 2012.

観測との比較: HR図上の位置



*本モデルの表面温度 << 星風無し星モデルの表面温度. *しかし, WR星の表面温度は本モデルよりもさらに小さい. ▶ WR星風(の超音速領域)の構造は, 単純な星風モデルでは不十分.

Summary & Discussion

- ・星風と滑らかに繋がったHe星モデルを構成した.
- ・星風の加速は鉄族元素のopacityにより開始される.
- ・本モデルの質量放出率 ~ WR星の観測値.
- ・スケーリング則: $\dot{M}_{
 m w} \propto L_{*}^{1.2-1.3}$
- ・本モデルの表面温度 << 星風無し星モデルの表面温度.
- ・Wind大気モデルを用いるなどして, line opacityの効果を 取り入れたモデル化が必要.